

さいたまここに人あり

普通のサラリーマンが

野宿生活に



—貧困は自己責任ではない

ほっとポット 藤田孝典さん

20代の社会福祉士たちが、河川敷や公園などを見回り、野宿生活者や生活困窮者の相談支援活動をおこなっているNPOほっとポットがさいたま市岩槻区にあります。

いま、「派遣切り」のような雇用の不安定化と貧困の広がり、社会的な関心が高まっています。「埼玉の貧困をなくそう」と、県内の市民、弁護士、NPOなどが集まり、昨年12月に「反貧困ネットワーク埼玉」を立ち上げました。今年3月21日、22日には大宮の鐘塚公園で「反貧困・駆け込み大相談会」をおこない、相談者250人、ボランティア550人がかけつけました。

「反貧困ネットワーク埼玉」代表でNPOほっとポット代表理事の藤田孝典さんに、生活困窮者への支援を始めたきっかけなどをお聞きしました。

困っているときはお互い様

■市民が参加して取り組んでいこうという雰囲気は、大きな変化ですね。最近の「貧困」問題やホームレスの人たちに対する市民の意識は、どう変わったと思いますか？

大きな変化でしたね。最近ようやく、「困っているときはお互い様」という雰囲気が出てきました。

これまでは、ホームレスに関わったり、生活困窮者の支援をしていると話すと、「自己責任じゃないの」という声が根強くあつたんです。

うちの父親もバリバリのサラリーマンなので、「ホームレスになるなんて、無計画だ」という人だったんです。いままでは、「どうやってもそういう状況から抜けられないのは社会にも問題がある。そういう社会を変えなきゃいけない」ということも言い始めています。

生活に困っている人も多いし、生活保

護を受けられない人も多いし、このままだと自殺する人も増えるし、犯罪に走る人も出てきてしまう。今回、市民がこれだけ駆けつけてくれて、支援してくれる人がこれだけいるんだということに、ものすごく勇気をもらいました。みんなが住みやすい社会にしていきたい、みんなを取り組んでいけたらいいなと思いましたね。

「普通」の人がホームレスに

■サラリーマンをされているお父さんのもとで育って、ホームレスに関わるなんて想像もできなかったと思います。それなぜ支援をしようと思ったのか、き

かけはなんですか？

もともと僕はおばあちゃん子だったんです。将来は老人ホームに勤めて、じいちゃん、ばあちゃんの介護をできればい



余儀なく野宿に

いと思っていました。それで福祉系の大学に入って、ヘルパーを目指していたんです。

大学2年の時、アルバイトに行く途中でぶつかったホームレスのおっちゃんがいたんです。それまではホームレスなんて関わったこともなかったし、「しようがない人たちだな」とも思っていました。その時は「嫌だな」とは思ったんですが、話をしているとそのおっちゃんは銀行の支店長をしていたという、普通のおっちゃんなんです。「なんでホームレスにな

自己責任ではすまされない

銀行勤めの「普通」の人が、なんでホームレスになってしまうのか。大学では、生活に困ったときは「生活保護」とか「失業保険」、病気なら「労災」と、いろいろな制度を勉強しますが、このおっちゃんには何一つ適用されている制度はなかったんです。それで家族がいなくなる、すくとホームレスになってしまう。

っちゃったの」と聞くと、当時仕事が忙しくてうつ病になったんです。うつ病で会社に行けなくなつて退職するんですが、病気や年齢的にもなかなか次の仕事に就けなくて、結局お酒に逃げちゃうんです。それでアルコール依存になって、家族も支えきれなくなつて、退職金は奥さんや子ども達に渡して離婚。おっちゃん生活できなくなつて、消費者金融でお金を借りるようになって、夜逃げ同然に家を出て野宿にいたるといふ経緯をたどるんです。

うちの父親も、もしかしたら自分も将来そうなつてしまうかもしれないと、その時初めて危機感を抱きました。

そのインパクトがすごく大きくて、それをきっかけに「ホームレスは自己責任だなんて言えないんじゃないか」と思い始めました。

それからの大学2年間、新宿でホーム

レスの夜回り活動を始めました。銀行の支店長や社長をやっていた人、田舎から出てきたけどちよつと失敗しちゃった若い年くらいの人、DVで逃げてくる人、路上にはありとあらゆる人がいるんです。でも、誰一人として大学で習う制度に当てはまっている人はいない。これはおかしいんじゃないかと、2年間夜回りしながら葛藤していましたね。

■「ほっとポット」の活動は、よくある炊き出しや物品支給のようなホームレス支援とは違いますよね。その人の自立を支援していくという。それはどのように生まれただんですか？

2年間夜回り活動をするなかで、やっぱり多いのは炊き出しなんですよね。その日その日の食事を提供するのも大事だとは思いますが、炊き出しに来る人は路上に帰し、また炊き出しに来るといふサイクルでは、「このおっちゃんは今後どうしていくんだろう」ということに気がきました。この炊き出しに来なくても食べていけるよう、地域生活が営めるように環境を整えることが必要じゃないか。それが本質的な問題解決になつていくんじゃないかと考えるようになってき

たんです。

困っている人を生きささせる活動

■「ホットぽっと」はどのようにできたのですか？その活動内容もご紹介ください。

「ホットぽっと」は2006年に法人化しました。僕が埼玉で活動を始めたのが2004年なんです。そのなかで、生活保護をもらってもアパートで生活できない人が出てきて、そういう人たちに専門的な支援ができるような環境が必要ということ、立正大学に金子充先生という方の研究室を訪ねました。公的扶助、社会保障などを研究している方で、「僕も分らないのでいっしょに研究しましょう」ということになって、その研究室のメンバーと一緒に「埼玉のホームレス問題をどうするか」ということを語り合っただけです。そのなかで、今のよう形で立ち上げました。アルコール依存やギャンブル依存のある人もいますから、そ

ういった個人の事情に沿った丁寧な支援が必要なんです。せっかく生活保護を受けたのにお金全部をお酒につぎ込んでギャンブルにつぎ込む人がいる。一般的に見れば「だめな人」ですけど、医学的に見れば「依存症」という病気ですから、治療が必要です。そういった側面を見ていこうと、アパートに入った後も生活が見守れるように、地域生活サポートホームや民家、会社の寮などを借りて支援していくようになりました。

その他にも、生活に困っている人全般から相談にきますよ。「自殺したい」「夫の暴力から逃げたい」という人、「おばあちゃんの介護に疲れた」という人もいます。もちろん「住むところがない」という人も多いですが、ありとあらゆる相談がくるんです。

年間相談者約500人のうち、約40



孤立しないために、食事会

0人が家のない人です。生活保護制度に結びつけたり、協力してくれる不動産屋さんと交渉して空き物件に入れたり。お金がなければ融資制度につなげたり、社会福祉制度につなげたりします。ざっくりいえば「何でも屋」、「何でも相談所」です。

福祉事務所からも相談が来るし、刑務官とか保護観察官に「本当に困ったらここにきてみなさい」と連絡先もらって刑務所から出て、茨城から歩いてきたとか、府中刑務所から来たという人もいます。

よく「生活に困って自殺を考えています」という人がいますが、「自殺はもつたいたないのでやめてください」と言っています。うちにくれば弁護士さんも紹介しますし、家を確保したり制度にむすびつけたり、何らかの手段はありますから

国や行政に課題をつきつける

■本来、行政がやるべきことをやっているといえますよね。

そうですね。生活に困っている人がた



田中友里（聞き手）

くさんいるなかで、制度がまったく知られていないんですよね。多重債務の人は「弁護士費用がかかるとか、いかに

ね。最近はいのちの電話の人から聞きました」という相談も来るんです。そういう相談活動を支えてくれるのは、市民の皆さんや民間企業からの寄付や会費なんです。

「生活保護を申請したら窓口で追い返されるんじゃないか」と思っている人が多い。よく「借金があると保護を受けられ

「あるべき」を押しつけない

ない」と言われますが、そんなことはないんです。行政の窓口が親切に制度を教えてくださいれば良いんですが、追い返すということもあります。そういうときははいっしょにいつて本人の権利を守る、そういう活動をしています。

国や行政の一番大きな役割って、日本国民を守ることだと思っんです。そもそも、ちゃんと生活できる仕組みをつくることは行政側の責任であって、民間がやることではない。僕らも、相談が来たから受けるというだけじゃなくて、行政や国に「こういう課題があるんだ」と突きつけていくことが今後の仕事だと思っんです。

■最後に、先生たちに一言お願いします。

僕は高校でも大学でも、はぐれもんだつたんですよ。ルートから外れてたんです。ただ、学校の先生には恵まれていて、

個を尊重してくれたことは大きかったです。高校は進学校だったんですが、先生は「好きにやればいいよ」と「ヘルパーになってじいちゃんばあちゃんの役にた

つのもそれはそれで良いことだ」と言ってくれました。

親や先生たちの時代の「正社員として働いて30代になれば安定した家庭を持つ」というモデルが崩れたのが、いまの20、30代なんだと思います。彼らは当たり前じゃない自分社会に要らないんじゃないかと思ってしまう。「当たり前」とか「あるべき論」を押し付けるのは間違いないかと思うんです。こういうご時世だと、正社員にじゃなきゃだめだとか、公務員がいいという考え方が高まるけど、安定した職業についたからといって幸せだとは限らない。一流企業に入って過労死するほど働かされるのが幸せだとも限らない。その人その人の価値観というのがあるんですよ。親や先生の指標に合わせるんじゃないかって、子どもが何をやりたいのか、何を思っているのか、寄り添っていくのがいいんじゃないかなと思います。進路とか、悩みのときは、おおらかに、一つの枠に当てはめず、個を尊重してくれるとありがたいなと思います。

ほんとポットの活動を 支えてください。

特定非営利活動法人 ほんとポット

〒339-0052 埼玉県さいたま市岩槻区太田 1-2-14

電話 / FAX 048-793-5160

メール hotpot-fmt@tuba.ocn.ne.jp

ブログ <http://hotpot2006.blog102.fc2.com/>

○会員として支えてください。

正会員 入会金 5000 円、年会費 5000 円

賛助会員 年会費（入会金含む）5000 円

○寄付金やカンパをお寄せください。

随時、寄付金や扇風機、暖房機、テレビなどの家電製品（使用可能なもの）、テレホンカードなどの寄付を受け付けています。

埼玉りそな銀行 南越谷支店 トクビ）ホットポット



口座番号 普通 4974399

ゆうちょ銀行 10330-3316681 特定非営利活動法人 ほんとポット